平成23年７月20日　第16号

浄泉寺護寺会報

URL http://www.hds-net.co.jp/jousenji/　　発行者　浄泉寺護寺会会長　岸　順　幸

あいさつ

護寺会会長　岸　順　幸

暑中お見舞い申し上げます。

一年を過ごすことは早いもので、23年度の事業がスタートする時期となりました。ご門徒の皆様方には、日頃から護寺会活動では積極的にご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

今年は大変な大地震・震度7がおきました。3月11日午後2時46分ごろ、マグニチュード9のもの凄い勢いで、地鳴りとともに地震が襲って来ました。

マグニチュード9の巨大地震は、地震観測が始まってから最大の地震だそうです。国内最大の地震が東北から関東方向にかけて発生し、広い範囲の大規模な津波で、沿岸部は、建物が壊れる・犠牲者が多数など壊滅的な被害がおこり、途方もないもの凄い大地震でした。

岩出山地域でも震度5強だったが、民家の家屋が倒れたり、お寺でも周囲にある土留めが崩れたり、史跡名称・旧有備館に於いては、主屋が倒壊になってしまい、貴重な文化財だけに残念でなりません。

大地震の3月11日から4ヶ月が過ぎ、今でも毎日のように余震が続いているこのごろです。

さて、今年も護寺会事業の新年度となりました。6月25日ご門徒皆様方の参加をいただき、23年度の総会を開催いたしました。議案は、22年度の決算並びに23年度の事業計画・収支予算、役員選任として後任監事の改選など、質疑・ご意見など審議を得て、議案3件の賛同をいただき、新年度事業として決定をいたしました。つきましては、護寺会事業の活動を昨年同様一層のご協力を宜しくお願い申し上げます。

今年は、3月19日から5月28日まで、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要で、本山参詣の年でした。昨年の10月5日には御遠忌記念講演会があり、作者五木寛之氏から「親鸞聖人の情（こころ）」の演題で講演会がありました。講演のお話を思い出し、五木寛之作「親鸞」を改めて読みながら、御遠忌法要のお参りを楽しみにしておりましたのに……突然の震災により、浄泉寺が予定していた本山の参拝は、残念ながら中止になりました。いつか改めて、ご門徒皆様方と共に上山参拝をしたいものですね。

最後に、今年も一層のお力添えをお願いし、ご門徒皆様方のご健勝とご祈念を申し上げ挨拶といたします。

（合　掌）

親鸞・越後へ遠流

責任役員　赤間栄夫

法然や親鸞の処罰は当時の僧尼令に従って行なわれ、僧侶は原則的には国家の許可によって出家され国家の厳格な統制の枠内にありました。流罪となった親鸞は僧籍を奪われた俗人となり、藤井善信（よしざね）という名前を与えられ流罪地の国府に赴きました。当時でいう国府の所在地は、現在の上越市の直江津であったろうと推定されています。

▼愚禿（ぐとく）

愚禿の愚は自分をへりくだって使う言葉。禿は禿（はげ）頭とか坊主刈りにした頭のことで、一般的には剃髪した僧侶の謙称。ここでは僧であって、しかも妻帯している親鸞が自身を指して言う謙称。配流になった越後において自ら愚禿と名のるようになり『教行信証』の後序には「しかすればすでに僧にあらず俗にあらず。このゆえに禿の字をもって姓とす。」とあります。国家が無理やり僧侶たる身分を剥奪してしまった。だから、自分はもはや僧侶でもないし俗人でもない。したがって自分は禿の字をもって姓とするのだということであると思います。親鸞はそれ以来、自らを非僧非俗と規定して一生涯その立場になって生き方をつらぬき通しました。著作の中や奥書等にも必ず愚禿（おろかなはげあたま）と名のり愚禿親鸞あるいは愚禿鸞と署名しております。

▼流罪

承元の法難によって専修念仏教団が弾圧され親鸞は僧籍を奪われて流罪になったことも、彼の一生の中では法然との出合いと共に大変重要なことであったと思われます。親鸞の思想はこの越後への流罪ということで、一段と深まりを見せてこれ以後一生涯にわたってつらぬかれたのだと思います。

親鸞が流罪になった上越市の直江津は、海岸が近いため雪が海からの風に吹きとばされ、積雪はあまり多くはないようですが、すぐ隣りの高田は日本でも有数の豪雪地で「この下に高田あり」という看板が掲げられたことがあったという伝説が残っています。

当時の流罪は近流、中流、遠流という三種があり、その中にあって親鸞に下された遠流は、死罪に次ぐ重い刑罰だったのです。流罪になった親鸞がどのようなルートで越後に赴いたのかは、はっきりした記録は残っていません。おそらくは陸路を主として近江・越前・加賀・越中を通っていった可能性が大きいと思います。しかし陸路には親不知という断崖絶壁が海から高くそそり立つ有名な難所がありますので、この地をさけて舟にて直江津の五智にある居多ケ浜に着いたのではと思います。

▼居多ケ浜（こたがはま）

居多ケ浜は、親鸞一行が上陸した海岸と伝えられており、現在「親鸞聖人御上陸之地」という石柱が立っております。また親鸞の供二人を描いたレリーフが石の塀にはめられてあり、すぐ近くに「居多ケ浜記念堂」がございます。居多ケ浜から南へ歩いて二分のところに五智国分寺があり、現在立派な三重の塔が残っています。これは居多ケ浜にあったものを上杉謙信がこの地に移したと言われています。この国分寺の一隅に親鸞が上陸して最初に住み着いたという竹之内の草庵があったと伝えられております。（親鸞の教えに学ぶ）

かつて私たち（浄泉寺・成願寺）の一行が居多ケ浜を訪れたときは雨がふりかかり波がだぶんと海岸に打ちつけるという生憎の天候でしたが、親鸞聖人に思いを馳せ両手を合せ静かにお詣りをしたことが昨日のごとく想い出されます。

居多ケ浜
南弥阿奴陀聞（ナミアメダブン）と打ち寄せる
渚に宗祖親鸞を偲ぶ

赤間有涯・詠む

浄泉寺護寺会総会報告

平成23年度浄泉寺護寺会総会が去る6月25日㈰午後1時から開催されました。

開会に先立ち、出席者全員で正信念佛偈を唱和し、本堂北側にある「倶会一處」の前で赤羽根住職の読経のもと、赤間栄夫責任役員と岸順幸会長が代表して焼香の後、総会の開会となりました。

坪田洋さんの司会のもと、会長の挨拶に続き、議長に庄司寿夫氏（東川原町）を選出、平成22年度の事業報告等の審議が行われ、すべて満場一致で承認されました。

▼平成22年度事業報告

役員会（年間4回）
正信偈勤行の集い（毎月10日）
上山研修（6名参加）
平成22年度総会実施
住職在任50周年お祝いの会
護寺会会報発行
仙台組門徒会会議（3名出席）
一斉清掃・晨朝参詣
万灯篭会（8月13～16日）
宗祖親鸞聖人七百五十回ご遠忌お待ち受け事業、劇団希望舞台「釈迦内柩唄」公演
（入場者数380名）
仙台組公開講座
東北別院報恩講参詣
おみがき（15名参加）
浄泉寺報恩講
修正会（1月16日）

▼平成22年度収支決算報告

収入82万8952円
支出75万3617円
残金7万5335円次期繰越

※意見　収支決算の中で「上山研修基金5万円とあるが収支残高を表記すべきでは」との意見に対し、執行部から「来年度から表記する」旨の回答あり。

▼本堂建設後の特別会計報告

▽収入の部
繰越金　672万8121円
利息　8326円
佐々木芳雄様より　50万円
収入合計723万6447円
▽支出の部
ブロック塀工事費105万円
次期繰越618万6447円

※本特別会計名称は来年度から「維持改善基金」と改めます。

▼監査報告監事内田政明氏より「適正に執行されている」旨報告

▼平成23年度事業計画

前年度事業の継承を基本とする

▼平成23年度収支予算

収入・支出84万円

▼役員の一部改選

監事大内達男氏の辞任により後任に平塚正寛氏（横町）を選出

総会終了後には例年どおり懇親会が実施され、会員相互の親睦を図りました。

お盆の行事について

◎8月7日、午前5時から一斉清掃（墓地、境内地）、各自の墓地と本堂境内周辺の清掃を行います。6時から朝の勤行（おつとめ）、本堂で茶会、7時に解散となります。

◎8月13日から16日の夜6時30分～8時、万灯篭会が行われます。

参道両側の灯篭に、赤あかと灯がともり、幻想的な雰囲気の中での墓参りは、夜の風物詩ともなりました。是非、ご家族揃ってお出かけください。

なお、灯篭記名のお申し込みは地区役員か寺までご連絡ください。

会費は一基千円となります。

お墓参りのお願い！

○造花はあげないでください。
○お供物はお持ち帰りください。
○茶わん、カン類等、燃えないゴミはお持ち帰りください。
○ゴミ置き場には、紙、樹木、生花以外は捨てないでください。

「五木寛之」作品との四十年

平塚正寛

私が初めて直木賞作家五木寛之氏の作品に接したのは、40年も前の青年期、学生時代の頃であった。その著作の一つである「青年は荒野をめざす」というタイトルに魅かれ、また、その内容に甚く刺激を受け、当時の内向きな心を外に開かせ、広く海外に世界へと目を向けるようになったのは、今にして思えば氏の影響が大きかったとも云える。

今、日本人の多くがごく当たり前のように海外に出かけたり旅行するようになり、それはブームからライフスタイルへと変わってきたと言っても過言ではないと思われる。しかし、30年も前、教職の仕事ではあったが、中央アメリカに位置する太陽の国メキシコで、妻子と共に3年間生活したことは、当時の私自身の「荒野をめざす」できごとであった。

その後の氏の著作「日本人のこころ」や「生きるヒント」、エッセイ「地図のない旅」、また、各界の著名人との対談などは、その時代の日本人の心のあり様や生きる姿、民俗を平易な文章で鋭く写し出し、私自身にとって困難な時代を生きる上での心の道しるべとなってきたように思われる。

そして今、氏は深く仏教に関心を持たれ、また関わり、その著作が浄土真宗の確立者である親鸞聖人にまで及んでいるのは、真宗大谷派浄泉寺檀家の一人である私にとって大きな驚きであり、うれしくもあった。

さらに、昨年思いがけず仙台組公開講座「五木寛之講演会」を拝聴する機会を得ることができたのは、40年来の大きな喜びであった。その講演の中で、また著作「他力」でも述べている「教行信証」の一句『他力本願』は、今私の心に最も響くことばである。

若くてエネルギーがあり元気のある時代は、まさに玄奘三蔵に出会うまでの孫悟空のごとく「自力本願」であり、すべてが自分の力によって成し遂げられたという錯覚に陥りやすいものである。しかし、私たちは年齢に関係なく、常づね周りの人々によって支えられ生きているという事実をしっかりと受け止められるようになると、世の中がまた違って見えてくるはずであり、人を尊敬し穏やかな心にもなるように思える。

自己本位で閉塞感のある時代であるだけに、そんな心のあり様を持ち続けたいものである。

（追記）

この度の護寺会総会において、皆様の賛同を得て監事の役職に就くことになりました。現役時は護寺会への関わりが少なかっただけに、反省の念を込めて微力ではありますがご協力申し上げます。

宜しくお願いいたします。

あとがき

今年は、宗祖親鸞聖人七百五十回ご遠忌法要が3月19日から5月28日まで本山（東本願寺）で厳修された。私達も団参を計画したのだが、3月11日の震災で中止やむなしとなった。

私は、かねてから学寮の仲間との約束もあり、5月25日から2泊3日の日程で参詣できた。

その折、京都市内を歩いたが、どの場所にも東日本震災義援の募金箱があった。

特に奥嵯峨の馴染みの店では「ガンバレ東北!!」のメッセージ入りストラップを沢山いただいた。奥様手造りの組紐を使いわざわざ作らせたとのこと。

普段何気なく立ち寄っていたこの店は、百人一首で有名な小倉山を借景にした、素晴らしい庭のある呉服商で、京都の老舗である。

ご主人の熱い思いのこもった応援メッセージに感謝している。

（住　職）